園芸風土記

徳島県のやさい園芸あれこれ

徳島県農協中央会
佐藤靖臣

徳島県のやさい　昭和50年度の栽培面積は12,627ha，市場販売量268千t，売上額は236億円である。昭和40年にくらべ，面積では6％の減だが，販売量は77％の増，販売額では491％の伸びであった。

第1表の品目別の販売順位では，レンコンの34億円をトップに，カンショ，タケノコ，ダイコン，ホウレンソウ，キュウリ，イチゴが20億円以上である。

施設やさいよりも露地やさい，それも上物が主位の座を大きく占めているのが，本県やさいの特長である。しかもその順位はこゝ10年間，殆んど変っていない。

たゞ昭和44年からの稲作転換では，水稲からレンコンへの転換が，いささかブームめいた動きで続いた。45年には300haを越える新産地が誕生したが，47年以後はそのレンコン田がカンショ畑に強い勢いで変って行った。

第1表　昭和50年度徳島県やさい生産販売状況

品目	面積	生産量	市場販売額
レンコン	918ha	14,000 t	344千万円
カンショ	1,070	24,289	263
タケノコ	1,400	19,225	244
ダイコン	1,450	82,300	222
ホウレンソウ	1,050	17,400	218
キュウリ	454	24,300	215
イチゴ	146	3,853	200
洋ニンジン	482	13,024	107
ナス	224	8,990	100
トマト	137	5,040	58
青ネギ	196	5,360	53
スイカ	337	10,090	50
ゴボウ	185	3,680	49
花ヤサイ	137	3,942	42
レタス	146	2,350	27

レンコンのハウストンネル栽培（鳴門市）

カンショの畦立作業

海砂を客土しての畑地化だがレンコンよりもカンショとダイコンの二毛作化が，はるかに安定して有利だ……という理由によるもので，47年には1,000haを越えた。

鳴門市とその周辺地区および徳島市川内町が主産地である。高系14号を2月上旬に伏せ込み4月上・中旬に植出しする早掘栽培，この後作に，9～10月に大蔵ダイコンが入る。また5月から6月植のカンショは10～11月に掘取って，完備した12°Cの貯蔵庫に入れ，12月から6月まで出荷する。1戸当りの平均は

第2表　伸びたやさいと主産地

品目	40年	45	47	49	50	主産地
レンコン	645ha	1,020	1,080	970	918	鳴門市、徳島市
	100	158	167	150	142	板野郡
カンショ	600	900	1,000	1,000	1,070	鳴門市、徳島市
	100	150	166	166	178	松茂町
ホウレンソウ	725	900	927	1,050	1,050	徳島市、石井町
	100	124	127	145	145	上板町
イチゴ	32	84	129	145	146	徳島市。小松島市
	100	262	403	453	456	阿南市、羽浦町
洋ニンジン	84	218	310	418	482	藍住町、石井町
	100	259	369	498	573	大野町、鴨島町
花ヤサイ		83	151	137	167	徳島市、阿南市
		100	182	165	201	藍住町、土成町
レタス		50	104	136	146	吉野町
		100	208	272	292	

60aだが，2ha以上という大経営も少なくない。いずれも大型トラクター，自動マルチ機，収穫機など，広い範囲にわたって機械化，近代化の努力がつづけられてきた。

県下で最も後継者に恵まれ，農協の貯蓄高も最高という活況が続いて久しい。イモとダイコンの単純作による県下一富裕地帯だが，30年，50年に及ぶ長い連作地帯だけに，いろいろの障害も出はじめている。

施設園芸　イチゴの120ha，キュウリの88ha，ナス41haのほか，レンコンのハウス20haを含めて9品目で319haに過ぎないし，48年以来概ね横這いである。伸びるだけ伸びた，ともいわれるが，こゝでは後継者不足が特に問題にされている。

芳玉苺の電照栽培（板野郡土成町）

県内2ヶ所に農林省の設置事業による集中管理モデル温室団地がある。ガラス温室の重装備された大規模施設はモデルとして十二分であり，このうちの一つ，土成中央温室園芸組合（富加見正実組合長ら10名）は着々として成果をあげ，昨年度の天皇杯受賞者である。

しかしこの種の施設の後継者は，今もって出そうにもない。

イチゴは本県農業試験場育成の「芳玉」の独壇場で，超促成，電照栽培と普通促成が行なわれ，12月から5月まで，阪神市場に出荷されている。品質特にすぐれ，耐病性も強いことなどから，市場の評価は高い。

徳島市を中心に，吉野川流域と東部沿岸平地部に広く拡がり，施設やさいのうち最も伸びが大きく収益性も高いが，目標の150ha達成はなお遠い。

キュウリはこれまで，久留米落合H型の長期一作型であった。10月中旬播種して，12月から7月までに10a当り12～15tの収量であったが，こゝ2，3年来関東系の白イボ攻勢が強まり，9月上中旬播きの抑制と，12～1月播き半促成の二作型を組合せた試作が，各産地で行なわれ，18～20tの多収成績をあげて大きな関心を集めたが，今年からさらに黒イボの摘心用「まじみどり」が新らしく登場，白黒の混乱を一段と拍車づけている。

しかし来年度の大勢はいぜん，久留米落合が占めるが，阪神市場が次第に白イボへの関心を強めていることから，早晩，白イボ時代は必至と見られている。

露地やさい　本県のやさいの本命は，やはり露地やさいである。昭和40年以来，伸び足をつづけてきた，いわゆる生長やさいの動きと主産地は第2表の通りである。

トンネル栽培の洋ニンジンの伸びをトップに，レタス花ヤサイとニンニクなどである。

ホウレンソウは徳島市と周辺地区が特産地で，すでに50年を越える産地が多い。ほとんどが水稲の裏作として定着しており，兼業化のすゝむ市街地のなかで，老人，主婦の冬の家内作業向きとして，人気は衰えない。

専業農家は1～2.5haを栽培，荷造り調製を附近の団地族のパートで処理するという，新らしい経営方式が軌道に乗っている。混住社会の上手な活用例としても注目されている。

栽培面積は1,000haが徳島の限度とされており，現在は横這い状態。仕向先は京阪神市場が8割を占め，県青果連の強力な統制出荷が行なわれている。

洋ニンジンは，吉野川と那賀川流域の沖積層に大きく伸び，さらにこれからの飛躍が期待されている。

夏やさい（キュウリ，シロウリ）→秋やさい（キャベツ，ハクサイ，ダイコン）→洋ニンジンといった三毛作の輪作体系が吉野川流域，特に板野郡藍住町，名西郡石井町に定着し，すでに10年を越えた。

しかし需要の伸びに支えられて，水稲→洋ニンジンの作型も新らしく伸びはじめた那賀川流域の阿南市上中，大野，加茂谷などはその代表産地である。

いずれも11月下旬から12月中旬に五寸ニンジンを播種，ビニールトンネルをかけて4月中旬から6月中旬まで，京阪神を主力に京浜，中京，北陸市場を占める。施設経費の少ない手軽るな割に，収益性の高い，栽培の容易な成長やさいとして，県下の関心は高い。特に麦に代わる冬春やさいとして，普通作物地帯への発展が期待されている。

花ヤサイは徳島市川内町の75haを首位に，水田裏作やさいとしての伸びが大きい。育苗を共同化して，一気に集団産地化しようという農協も多くなった。小松島農協などは，主婦の中小企業への出稼ぎ防止策として，団地づくりをすゝめており，予期の成果をあげている。

レタスも急増の気構えながら，200ha実現はなお暫く間があろう。しかし吉野町を中心に，周辺地区への波及が期待されており，主婦の冬の間の家内作業にピッタリだとして人気がある。現在，工事中の阿波北岸用水施設の完成が鶴首して待れる特産品である。